論文

「危険」を消費する
——日本人バックパッカーが旅で経験するスリルの文化・社会的意味

大野哲也

1　はじめに——ある日本人バックパッカーの死

本稿の目的は，多様化する現代ツーリズムの中で，近年，特に若者層から絶大なる支持を受けているバックパッキングに注目して，旅人が旅の過程であえて危険な行為に足を踏み入れるのはなぜなのか，その理由と意味について考察することにある。

グローバル化が進む現代世界において，私たちは，もはや「他者」との接触を抜きにして，生きていくことはできない。衣服，食料，電化製品など，身の回りに溢れる輸入品の数々は，私たちの生が直接あるいは間接に「他者」によって支えられているということを如実に示している。

このような「他者」との接触を「コンタクト・ゾーン」と呼び，領域性あるいは空間性という観点から，そこでおこなわれる相互行為の社会的意味を読み解こうとしたのはメアリー・ルイーズ・プラットであった［Pratt 1992］。「コンタクト・ゾーン」という概念を提唱した *Imperial Eyes* の中で，プラットは，「コンタクト・ゾーン」の具体的な事例として，18～19世紀における冒険家を取り上げている。植民地主義全盛の当時，己の大いなる冒険心を発揮して「未開の地」へ飛び込んでいき「他者」と接触することに「面白さ」や「生きがい」を見出した冒険家たちは，まさに「コンタクト・ゾーン」を体現した人々であった。

彼らの冒険心の発露によって，現代世界から「未開の地」はなくなってしまったわけだが，だからといって「コンタクト・ゾーン」という「他者」との接触領域までもが消滅したというわけではない。現代社会においても個々人にとっての「コンタクト・ゾーン」は，確たるものとして存在し続けている。たとえば，現代においても冒険的要素を色濃く残しているバックパッキングという旅は，見知らぬ「他者」との出会いを目指し，そこに旅の「面白さ」を見出したという点で，プラットが注目した冒険家の心性と共通点があるだろう。

「他者」との接触は，常に危険がつきまとう。それはときには命にかかわる。しかし危険は，危険であるからこそスリルを味わう「面白い」経験でもあった。冒険家を冒険へと駆り立てたものに，社会的評価や金銭的利得という実利的な要素があったことは間違いないが，それ以上に，彼らの駆動力になったのは，「他者」とのコンタクトの際に味わえる

OHNO Tetsuya　桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

スリリングでエキサイティングな感情の高ぶりであった。すなわち「危険」には，人々を誘引する甘美な魅惑も備わっているのである。

現代社会におけるバックパッキングにも，旅という「レジャー（余暇活動）」［アーリ 1995］であるにもかかわらず，危険な要素が遍在している。一般的なパッケージ・ツアーであれば，危険な要素は，あらかじめ旅行代理店の手によって，用意周到かつ徹底的に排除されている。しかしバックパッキングでは，命にかかわるような危険にも，あえて足を踏み入れるという，マス・ツーリズムとは転倒した行動パターンが認められるのである。

その一例は，2004年10月にイラクで起こった日本人バックパッカー殺害事件であるだろう。この事件は社会で大きな議論を巻き起こしたので記憶している者も多いだろうが，簡単に経緯を振り返っておこう。

現在でも頻繁に爆弾テロが起こり治安が一向に安定しないイラクであるが，今から遡ること8年，当時24歳の青年は，ワーキング・ホリデー制度を利用してニュージーランドで滞在したのちに中東に渡り，アメリカによる，フセイン・イラク大統領の暴力的排除によって無政府状態となった首都バグダッドに，ビザも持たずにわずか100USドルほどの所持金だけで潜入したのだった。隣国ヨルダン，アンマンのホテルで，従業員から受けた「危ないから今は行かないほうがいい」という忠告にも，青年は“I know”を繰り返すばかりで聞く耳を持たなかった。そして何度も「気持ちは変わらないか」と説得されたものの，青年は“I need go”と受け入れず，バグダッド行きのバスに飛び乗った。そしてバグダッド到着直後に青年は武装勢力に拉致されてしまい，悲劇的な結末を迎えるのである［下川 2005］。しかも彼が斬首される様子が映像におさめられ，武装集団の手によってネット上で公開されるという言語を絶する展開を見せ，大きな社会問題へと発展していった。

この事件が我々に不可解な印象を与えたのは，「なぜ青年は，あの時期にイラクに向かったのか」という疑問があったからにほかならない。というのもイラクは，2003年2月から事件発生までのあいだに，外務省から計61回もの退避勧告が出されていた「戦場」だったからである。旅というレジャーにおいて，一人の若者が「戦場」に赴くその合理的理由が我々にはわからなかったのだ。その苛立たしさが青年本人だけにとどまらず，青年の家族までをも「国家に迷惑をかけた」という理由で集中攻撃するという行為へとエスカレートしていった。なぜなら，武装集団から出された青年の解放条件が，イラクに派遣されていた自衛隊の撤退だったからである。自衛隊の海外派遣は国際貢献の一環であると主張する当時の小泉政権は，多くの国民から圧倒的な支持を受けていたので，青年の行為は「国益に反する」と非難の対象になったのである。

しかし驚くべきことは，青年が，けっして「特別」な存在ではなかったということだろう。というのは，この事件を取材したジャーナリストでもありバックパッカーでもある下川裕治によれば，青年が宿泊していたアンマンのホテルに置かれてあった情報ノート[1)]を見てみると，同時期に少なくとも8人以上（グループを組んで潜入した者もいるので正確な数は不明）の日本人バックパッカーがイラク潜入に成功していたというのである［下川 2005］。そしてノートには，彼らの手によって「イラクへ行こう！イラク……大変おもしろく，いい人たちであふれています。治安に対する緊張感を高めたうえ，ぜひ訪れてみて

下さい。この機会，逃すべからずですよ」，「夜10：45から11：10。約25分間にわたりバグダッドの空に銃声と共に照明弾が飛び交った。ひとつの場所ではなく，あちらこちらから仲間の鳴き声に刺激された犬のように銃声がバグダッド市内にひびきわたった」というようなコメントが残されていた。しかもそればかりではなく，潜入に成功した日本人バックパッカーによって，ルート，宿泊場所，移動手段とその値段などの情報までもが細部にわたって記載されていたという［下川 2005：136-151］。

この事件を取材したある雑誌は，日本人バックパッカーの内面では，危険な状況に直面したとき，それを回避するどころか，あえてそれに踏み込んでいくというような，錯綜した志向性が醸成されることがあるという指摘をしている。バックパッキングという旅の過程で，さまざまな危険な状況に接し続けているうちに，危険に対する感覚が麻痺してくるというのである［ヨミウリ・ウイークリー 2004］。つまり，一部の日本人バックパッカーにとって，「戦場」は「戦場」だからこそ，行くべき場所になっていたのである。

この事件に限らず，バックパッキングでは死亡したり，行方不明になったりするバックパッカーが日本人に限っても後を絶たない。たとえば2009年３月，筆者がおこなったネパールでの調査の際に，日本大使館の掲示板に，2006年にインドで行方不明になった日本人バックパッカーに関する情報提供を呼びかけるポスターが貼られていたのを見かけたが，これはその一例だろう[2)]。

これらの事件が象徴しているように，バックパッキングにおいて，単なる旅行であるならば当然避けるべき危険な対象に対して，あえてそこへ足を踏み入れていくという，パッケージ・ツアーとは逆転した志向性が，青年だけでなく，多くのバックパッカーに共有されているとすれば，そこにはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。それは果たして，「感覚が麻痺してくる」だけが唯一の理由なのだろうか。

このような「素朴」な疑問を出発点として，本稿では日本人バックパッカーの旅の実践を追いながら，バックパッキングにおける危険な経験が持つ，文化・社会的意義について考察してみたい。それによって，バックパッキングにおける危険の消費が，実は現代日本社会の「ありかた」と密接に関連しているということが明らかになるだろう[3)]。

2　旅における「危険」とスリルの研究史

グローバル化が進む現代世界において，人々の国境を越える移動は日々活発化している。このような現象をもたらしている要因の一つが，観光産業の世界規模の発展にあることは間違いない。それは，2008年の国際観光客の受け入れ総数が９億2,200万人となり，過去最高を記録したという事実からも［国土交通省観光庁編 2010：3］，あるいはまた，2009年の日本人の海外旅行者数が1,544万人を超えたという事実からも裏付けられる［国土交通省観光庁編 2010：25］。海外旅行というレジャーと，グローバリゼーションという現象は相互に正のフィードバックをもたらしているわけだが，さらにこれらの数字は，現代日本社会において，海外旅行が広く一般化したということも示している。

現代日本社会において，海外旅行の大衆化を牽引したのは，疑いもなく「パッケージ・

ツアー」という観光システムであった。パッケージ・ツアーとは，19世紀にイギリスの実業家トーマス・クックによって「発明」された旅の形態であり，この大量生産・大量消費型の旅行形態は，たとえ現地社会の言葉や社会情勢や文化に精通していなくとも，誰もが安心，安全，安価に旅行でき，異文化体験できるシステムとして，一気に社会に浸透していった。

たとえば，第二次世界大戦後の日本社会は，1964年になってようやく海外旅行が「自由化」[4]されたが，このシステムはいち早く導入され，同年にさっそくパッケージ・ツアーが催行されている[5]。その後の，日本人の海外旅行者数は，高度経済成長という要因も加わって急増していくわけだが，その原動力となったのはパッケージ・ツアーの充実と展開だった。

大量生産・大量消費型の旅行形態は，観光というレジャーを大衆化させたという意味においては大きな社会的役割を果たしたが，その一方で，大きな問題も内包していた。経済的に豊かで時間的余裕があるゲストが，ホスト社会の文化や環境を一方的かつ一律的に蕩尽してしまうという不平等な関係性が暴露されていったからである。1970年代から80年代にかけて，「新植民地主義」［山下 1999：34］とさえ糾弾されたパッケージ・ツアーに代表されるマス・ツーリズムは多くの批判にさらされ，それにかわる新たな観光形態の必要性が指摘されるようになっていった。そのような時期に脚光を浴びたのが，バックパッキングだったのである。

バックパッキングとは，イスラエルの社会学者・人類学者エリック・コーエンによれば，「非制度化された形態の観光 The noninstitutionalized forms of tourism」であり，それはマス・ツーリズムなどの「制度化された形態の観光 The institutionalized forms of tourism」の対極にある［Cohen 1972：165-182］。1970年代には，まだ「バックパッカー」という名称は生まれておらず，コーエンはそのような旅を実践する者を「漂流者 The drifter」［Cohen 1972：165-182］や「遊動者 Nomads」［Cohen 1973：89-103］と表現しているのだが[6]，具体的に思い浮かぶバックパッキングのイメージは，①長期間，②最低限の予算で，③いきあたりばったりに，④路線バスなどの交通手段を使い現地の日常生活に埋もれながら移動していく，というものだろうか[7]。大量生産・大量消費型の観光が時代にマッチしなくなっていったときに，それとは対照的な，現地社会に過大な負荷をかけることがなく，ホストとゲストが対等な立場で交流できる個化・私化された旅は，持続可能な観光形態としての可能性を高く評価されたのである。

そればかりではない。バックパッキングは，「真正」［MacCannell 1974：589-603］な異文化を体験できるという点でも高い可能性を秘めていた。旅行代理店の手によってお膳立てされた，いわば「まがいもの」の異文化ではなく，現地の日常生活に浸りながら現地の人々と同じ目線で，現地の生活や文化に触れられるというバックパッキングの特徴が「再発見」され，ツーリズムの新たな可能性として再評価されたのである。

だが，バックパッキングは常にリスク（「危険」）を孕んでいるという「難点」もある。旅行代理店の手によってあらかじめ旅のリスクが可能な限り排除されたパッケージ・ツアーとは異なり，旅のルート，スケジュール，交通機関，宿泊場所というような旅のすべ

ての要素を，自己選択・自己責任で計画・実行していかなければならないからである。このような観点からすれば，冒頭の青年の事例は，彼自身の判断ミスであり自己責任ということになるのも無理からぬことだ。

ともあれ，バックパッキングという旅行形態を選択する者は，旅を始める前からすでに，ある程度のリスクを冒すことを承知・覚悟していなければならない。だが，このようなリスクの先に，現地の真正な文化が体験できる可能性がひらけているのだとすれば，リスクこそがバックパッキングの核心であり，リスクを冒すことが旅の「面白さ」に繋がっているともいえるだろう。すなわち，リスクを冒すことを「難点」ではなく「面白い」と感じる「転倒した」志向と要素がバックパッキングには，あらかじめ，内在しているのである。

では，なぜ人間は，危険な行為に「面白さ」を感じたり魅惑されたりするのだろうか。危険を避けるのではなく，危険にあえて身を投じていくという，いっけん矛盾した人々の感情について論理的枠組みを具体的に提示したのがヨハン・ホイジンガだった。ホイジンガは，それを「遊び」という観点から説明している。

まずホイジンガは，「遊び」を「「本気でそうしている」のではないもの，日常生活の外にあると感じられているものだが，それにもかかわらず遊んでいる人の心の底まですっかりとらえてしまうことも可能な一つの自由な活動である，と呼ぶことができる。この行為はどんな物質的利害関係とも結びつかず，それからは何の利得も齎（もたら）されることはない。それは規定された時間と空間の中で決められた規則に従い，秩序正しく進行する。またそれは秘密に取り囲まれていることを好み，ややもすると日常世界とは異なるものである点を，変装の手段でことさら強調したりする社会集団を生み出す」［ホイジンガ 2009：42］と定義した。そのうえで，戦争を取り上げ，いっけん遊びとはまったく異なった行為だと思われる戦争の中から祭儀性や闘技性という「遊び」の要素を抽出している［ホイジンガ 2009：190-221］。そして，このような「遊び」は，人々に，緊張や歓びを与えるのだと指摘した［ホイジンガ 2009：19］[8)]。

ホイジンガの知見を踏まえれば，現代社会におけるツーリズムの発展がリスクの低減によってもたらされたことは，旅の面白さを削減させてきたという意味ではアイロニカルだった。そしてバックパッカーのあえてリスクを冒そうとする欲望の根源には，パッケージ・ツアーが主流になった時代だったからこそ，そのような旅に不満を覚えた者が，それとは真逆の旅を志向するという心性が浮かび上がってくる。ホイジンガの論を借りれば，パッケージ・ツアーは，安全，安心だからこそ，面白くないのである。

では，これを踏まえてツーリズム研究では，旅とリスクについてどのような議論がなされてきたのかを確認していこう。これまで，旅においてツーリストのリスク[9)]への志向性がいかに形成されるかについてはさまざまな研究が蓄積されてきたが，それは要約すると二つに大別できる［Uriely & Belhassen 2006：339-359］。一つは，日常から非日常への移動によって旅人は匿名性を獲得するとともに，所属する社会が持つ規範からも距離をとることになり，それがリスクへ近接させる誘因となるという解釈である［Wickens 1997：151-164］。もう一つは，アーヴィン・ゴッフマンの“action spaces”［Goffman 1967］という概念が基幹となっている。ゴッフマンによれば，ツーリストは，観光という非日常的

な活動空間に参入することよって，日常ならば立ち入らないようなリスクをともなう非日常的活動へ誘われるという。なぜなら，非日常的空間におけるリスクへのチャレンジは日常生活への脅威が少ないわりに［Goffman 1967 : 196］，ドラマティックな展開やチャンスに満ち溢れているからである[10]［Goffman 1967 : 260-261; Elsrud 2001 : 597-617］。

イスラエルの観光学者ナタン・ウリーリーとアメリカの観光学者ヤニフ・ベルハッセンは，これらの先行研究を踏まえつつ，ツーリストがなぜあえてリスクを冒すのか，その動機と契機を彼らの語りの分析から明らかにした。ウリーリーとベルハッセンによれば，リスクを志向するツーリストは，たとえばドラッグを使用する際には「警察が取り締まるのはツーリストではなく，地元の犯罪者だけである。なぜなら我々は，ドラッグをすることで地元経済に貢献しているからだ。したがって薬物に関する現地の法律は我々には適用されない。我々は地元警察によって守られてさえいる」という具合に，自己の行為を正当化する傾向があるという。また，リスクを冒す際には「国によってポリシーが異なるので，薬物は国境を越えて持ち運ばない」とか，「ヘロインをやるのは旅行中だけで，帰国したらやめるから中毒にはならない」など，彼らなりの自己防衛と自己納得の論理を構築していることも明らかにした。

旅人は，リスクを体験する際に生じるあらゆる事態を，自動的に自己に都合よく理屈づけることで，危険度を低く見積もり心理的プレッシャーを緩和するというのである。さらにまた，このような解釈をツーリスト・コミュニティで共有することによって，個々人の持つリスクへの敷居が次第に低くなっていくと指摘した［Uriely & Belhassen 2006 : 339-359］。旅人は，このようなリスクを冒すことでスリルを実感し，それが旅の面白さに繋がっていくのである。

たしかに，旅という行為においてあえてリスクを冒すという心性を，旅人が採用する自己納得の論理の分析から明らかにし，リスク体験によるさまざまな機能を指摘した先行研究は，観光研究に新たな地平を切りひらいた。しかし同時に，これらの研究によって，まだ解明されない部分があることも明らかになった。それは，本論に則していえば，冒頭の青年のように，バックパッカーの中にはリスク体験に「失敗」した者も少なくないということである。リスク体験に「成功」した者は，旅の面白さを満喫できるかもしれないが，リスク体験に「失敗」した者は，バックパッカー・コミュニティや日本社会の中でどのように意味づけられ解釈されているのかについては，いまだに不問に付されたままなのである。

バックパッカーのリスク体験の「成功」例の分析だけから，そのプラス面だけを抽出しさまざまな機能を強調することは，バックパッキングを，成功体験を製造する単純な装置として表象してしまうことに繋がってしまう。そればかりか，ともすれば，トラブルに巻き込まれたり，痛手を負ったバックパッカーを自己責任論で切り捨てることにも加担してしまいかねない。そのような学問的に思考停止した視座からは，「面白い」という個人的な感性に基盤を置きつつ，リスクを強く志向するバックパッカーがくりひろげる集団的な熱狂に，接近することはできないだろう[11]。

3　ヒエラルキーの形成

旅におけるリスクの社会的意味について考察するとき，リスク消費が旅の勲章や旅人のステイタスになるという指摘は手掛かりになるだろう。イギリスで51人のツーリストへの聞き取りをおこなった社会学者サイモン・カーターによれば，彼らは，アフリカが旅をするのにもっとも困難な地域だと考えていた。政治的，社会的に不安定であるということと，感染性疾患や，怪我や病気の治療のクオリティという，いわば健康に関する問題が彼らに困難性を想起させていたという。しかし，大きなリスクがあるからこそ，アフリカを旅することは，エキサイティングで驚愕の経験であると解釈されてもいる。そこからカーターは，旅する地域には難易度があり，危険な地域を旅することが旅人のステイタスを構成する要素の一つになっていることを明らかにした［Carter 1998 : 349-358］。リスクがスリルへと転換することで好奇心をかきたてられ，その好奇心をもとにアフリカを旅することによって，「リスクを冒した」ことが再帰的に「強い」自画像と社会的評価の獲得に繋がるというのである。

一方アジアは，長期間にわたって文化的統一性が保持されてきたという静的な表象が，ツーリストに社会的な安定性を連想させていた。この安定性は安全性へと変換され「安全なアジア」というイメージが構築されているのだが，ヨーロッパ文化とアジア文化の差異によって，欧米人にとってアジアの「他者性」は非常に大きく感じられている。さらに，アフリカのリスクは個人でコントロールはできないが，アジアのリスクは個人でのコントロールが可能だと考えられていた。彼らが感じるアジアのリスクが，HIV 感染と飲食物の衛生面に集中しているからである［Carter 1998 : 349-358］。ツーリストは，二つのリスクにさえ注意していれば，アジアを安全に旅することは可能だと考えているという。

また欧米人ツーリストにとって，ヨーロッパと北米は，旅人自身の出身社会との文化的ギャップがほとんどないので，旅のリスクはないと考えられていた。両地域の健康面のリスクについても，感染性疾患の罹患率が低いことから，心配されてはいない［Carter 1998 : 349-358］。カーターの知見に関連して，飲食物の衛生面だけに限定すれば，ツーリストは，アフリカとアジアはリスクが高く，ヨーロッパ，オーストラリア，ニュージーランドは低リスクだと考えているという指摘もある［Lepp & Gibson 2003 : 606-624］。

このような地域別の難易度ランキングは，日本人バックパッカー・コミュニティでも構築されている。以下では，現在日本人バックパッカーたちが情報発信と情報収集のために依存度を急激に高めているインターネットでのランキング形成に注目し，まずサイバー空間ではどのような言説が流通しているかを確認してみよう。

たとえば，「バックパッカーのひとり旅を応援します」というメイン・タイトルが掲げられた「トリカゴ」では，旅をする地域として，初級バックパッカーには東・東南アジアを，中級バックパッカーには南アジア，中米，北部アフリカ，中東を，上級バックパッカーには中央・西部アフリカを推奨している（トリカゴ HP）。

また2001年に開設され，12年12月までに37万回以上のアクセスがある「中高年バックパ

ッカーの旅」では，旅の地域として，初心者バックパッカーには東・東南アジアを，中級バックパッカーには北アフリカ，南アジア，中米などを，上級バックパッカーにはアフリカ，中近東，中央アジアの旧ソ連圏の国々を勧めている（中高年バックパッカーの旅　バックパッカー入門　HP）。

HP 作成者によって微妙な差異はあるが，両者は，簡便な東南アジアから最難関のアフリカまで地域別難易度が段階的に構成されている点で，一致しているといってよいだろう。これらの地域に対する認識は，カーターらの知見ともみごとに一致している。

実際に旅をしている日本人バックパッカーも，このような旅の地域別の難易度を共有している。たとえば高校を卒業後，アルバイトと旅を繰り返しているアーチャン[12]は，８年間，旅を東南・南アジアに限定していた。

なぜアーチャンは，東南・南アジアしか旅をしなかったのだろうか。それは，彼女が「東南アジアは若いでしょ」と語るように，東南・南アジアをバックパッキングの「初心者コース」だと考えていたからである。

アーチャンが「この人は旅１級とか，すごい人になると段持ちとか」と語るように，バックパッカー・コミュニティでは旅の量と質によって旅人を序列化する傾向がある。バックパッカーは安宿などで気軽に他のバックパッカーと会話を始める。もちろん話題は，自身の旅の経験である場合が圧倒的に多く，互いに自己の旅の経歴を提示し合うことで，彼らはコミュニティにおける相対的な自己の位置を確認・自覚していくのである。

そのアーチャンが東南・南アジアを「卒業」して，南米を目指したのは2006年のことだった。東南・南アジアで８年間も旅のテクニックを学んだアーチャンにとって，南米の旅の難易度はどれほどのものだったのだろうか。

> 南米は楽勝。南米の人〔筆者注：南米を旅している日本人バックパッカー〕は，アジアをまわって，「はい，次」って感じ。だから年齢層が高いんだよね。私なんて一番年下だもん。南米はもっと過酷かと思ってた。ぼられることもないし。いちいち値段交渉することもないでしょ。治安が悪いのもベネズエラだけだったし，カラカスだけだったけど，夜，町を歩かないとか，人通りの少ない道は歩かないとか，常識的なことを守っていれば全然危なくなかったし。（聞きとり場所，タイ・バンコク。以下同じ）

「楽勝」だったとアーチャンが振り返る南米ではあるが，それは彼女にはすでに８年に及ぶ旅の経験があったからだろう。東南・南アジアで多様な経験を蓄積してきらからこそ，アーチャンは南米の旅を「楽勝」だと感じることができたのである。その一方で「アフリカはまだ行きたくないなあ」と語るアーチャンの感覚は，サイバー空間で流通している言説やカーターらの知見とも一致している。

カーターらの考察は，なぜ日本人バックパッカー社会では，東南アジアの旅に低い評価を下すのかという問いにも答えてくれる。健康面や安全性についてのリスクは欧米人でも日本人でも差異はないが，文化的な親近感は欧米人より日本人のほうがより強いからであ

る。そのような親密感と安心感があるからこそ，日本人バックパッカーの多くが初めての旅の目的地として東南アジアを選択するのである[13]。しかし皮肉なことに，その安全性を求める心性そのものが，リスクを冒すというバックパッキングの核心の対極にあるからこそ，日本人バックパッカー・コミュニティにおける東南アジアでの経験は，相対的に低い評価しか与えられないのだ。

もちろんバックパッカー・コミュニティにおける位階序列は，旅をする地域だけで形成されるわけではない。リスキーだと考えられているあらゆる要素は，自己の地位を上昇させる要素へと読み替えられていく。たとえそれが買春やドラッグなどの「逸脱的」な行為であっても，リスクという文脈で再解釈され意味づけられていくのである。

たとえばアーチャンは，南米の旅におけるドラッグの経験を以下のように語っている。

> ドラッグは，打つやつじゃなくて吸うやつならやったことある。コロンビアでマリファナ持ってて2回警察に捕まったことある。友達と二人でタクシーに乗ってて，それでライブに行ったんだけど，警察の検問みたいなのがあって，見つかっちゃって。だけどタクシーの運転手が「俺に任せとけ」っていって。5 US ドル払ったら許してくれた。最初は 20US ドルっていってたけど，交渉してくれたら 5 US ドルにまけてくれて，おまけにマリファナまで返してくれたんだよ。（タイ・バンコク）

この語りが示すように，リスクの「成功」体験は再構成されながら旅のエピソードの一つとして他者に語られることになる。彼らは自分なりのリスク体験を蓄積し，それらの経験を再解釈し続けることで，自己成長を実感し，リスクを冒しそれを乗り越えてきた強い自己を獲得していくのである。それと同時に，まさにアーチャンが筆者にドラッグの経験を面白おかしく語ったように，バックパッカー同士がお互いの経験を提示し合うことによって，バックパッカー・コミュニティにおける位階序列が「自然」に形成されていくのである。

4 「危険」のエスカレーション

旅には，本人が主体的に冒すのではない偶発的なリスクも存在する。たとえば，ヤギ[14]は，5年6カ月の世界放浪のあいだにイエメンで交通事故に遭っている。ヤギが荷台部分に乗っていた中型トラックが対向車の大型トラックと正面衝突し，4人の死者を出すという大惨事に巻き込まれたのである。

> 事故の記憶まったくないですもん。気がついたら道路のうえで寝てた。大型トラックと正面衝突して，10人ぐらい乗ってたけど，前に座ってた4人ぐらい死にましたよ。最初から「こんなくねった道やのに，えらい飛ばして危ないな」って思ってましたもん。それで，起きあがって写真バシャバシャ撮りましたよ。みんな集まってきたりして。それで，病院へ行って，俺，脚とか怪我して何針か縫いましたよ。（大阪）

失神から目覚めると同時に，自らの怪我にも躊躇することなく，死体に向かってシャッターを切り続けた彼の「屈折」した興奮は，リスク体験という文脈では大きな意味があるだろう。なぜならそれは，たとえ望んだとしても，誰もが経験できるリスクではないからである。彼が奇跡的な生還を果たした凄惨な交通事故は，リスク体験という観点から見れば，凄惨だからこそ固有性の高い価値ある経験だったのである。

このような解釈がけっして的外れではないことは，旅を終えて帰国してある企業で働きだした，彼の語りからも理解できる。

> 俺と同じくらいの歳の奴で，俺よりいろんな経験している奴，絶対おれへんって自信ありますもん。会社で上司とかで偉そうにしている奴おっても，「お前，どんだけ経験があんねん？」って思いますもん。（大阪）

ヤギは，「死」に直面したという壮絶な経験でさえも，リスク体験という文脈で解釈することで強い自己を体現していた。生きている「今・ここ」から振り返ってみれば，九死に一生を得た交通事故だったからこそ，それはスリリングでエキサイティングな経験だったのである。このように，旅におけるあらゆるリスクが自己成長と強い自己の獲得という文脈で事後的に再解釈され意味づけられていくのであれば，経験するリスクはインパクトが大きければ大きいほどよい。自己を納得させ他者を説得する，より強力な資源へと変換することができるからである。

しかしながら，現代におけるバックパッキングは商品化[15]の過程にあるという指摘が近年なされるようになってきている［大野 2007，2010］。旅においてバックパッカーが実感する経験の多くは，実は，観光産業の巧妙な戦略によって用意・演出されたものなのだ。そのような商品化の波は，当然のことながらリスキーな行為にまで押し寄せている。パッケージ・ツアーならば当然避けるべきリスクまでもが，バックパッキングでは経験するべき価値あるものとして，商品化の対象になっているのである[16]。

たとえば，日本人バックパッカーから絶大な支持を受けているガイドブック『旅行人ノート 3 メコンの国』の初版［旅行人編集室 1996］では，カンボジアのアンコールワット観光の拠点となる町であるシェムリアプの情報について，「（プノンペン～シェムリアプ間は）タクシーで行くことも可能だが，この区間の陸路は非常に危険なので，お勧めできない」と陸路での移動を強く制止している。ところが，それにもかかわらず，直後に「シェムリアプ→プノンペンとタクシーを使った人によると，シェムリアプ（7:00）→シソフォン（15:00/2～ 3 ドル）→バッタンバン（17:00/2ドル）。ここまで延々と悪路が続く。シェムリアプ→プノンペン 1 日コースは強行軍すぎるので，バッタンバンに泊まるほうがよい。バッタンバンからプノンペンは乗合タクシーとバスがある」と，運賃，時間，道路状況に関する詳細なルート情報が掲載されているのである［旅行人編集室 1996:137-138］。ポル・ポト派が跋扈し内戦状態にあるカンボジアの危険地帯を，スリルを求めるバックパッカーの好奇心を巧みに煽ることでテーマパーク化し，彼らをそこに強力に誘導しているのだ[17]。

このようなバックパッカーをリスクへと誘引するメディアは，書籍類に限っても巷に溢れかえっている。たとえば，「旅カルチャー体験特集」とサブタイトルがついた『暗黒地球トラベラーズ』［EYECOM Files 編 1998］には，「ドラッグ」「買春」「危険地帯」などの項目別に世界各地の「訪れるべき場所」「おこなうべき行為」の情報が満載されている。「ドラッグ編」には，オランダ・アムステルダムでの「店選びのコツ」「お勧めの店」「どの種類のマリファナがいいか」「マリファナが効きだしたらどうするべきか」というような詳細な情報が列挙されている。[18)]

また「アジアントリップガイド」の項では，タイのバンコクとパンガン島，ネパールのカトマンズとポカラ，そして香港におけるドラッグの相場や買い方などが記述されている。ネパールの項目では，アヘンやヘロインの実勢価格までもが提示されているほどだ。

インターネットはもとより，「メジャー」なガイドブックから「マイナー」なマニュアル本に至るまで，あらゆるリスクを消費せよと，バックパッカーが強く煽られていることは，もはや明白である。「危ない」「やめろ」と警告しているのは建前だけで，実は「スリリングで面白い」とそれらのリスクを経験するように強く唆しているのだ。

もちろんこのような危険な行為への勧誘は，それがなされた瞬間に商品化されたことを示している。そして「危険」という表象だけは温存されたまま，誰もが「安全」に危険を消費できる構造ができあがるのである。

リスクへの扇動はメディアだけではない。旅の途中でも彼らはリスクに足を踏み入れるように誘惑され続けている。そしてそのうちに，商品化されたリスクではない「真正」なリスクを求める志向性さえもが醸成されてくる。安全なリスクから「真正」なリスクへと，欲望がエスカレートしていくのだ。

そのような増幅する好奇心と真正性への欲望の一例として，先のボスニア・ヘルツェゴビナ戦争において実際におこなわれた「戦争体験ツアー」を挙げることができるだろう。1996年，戦争が泥沼化し凄惨さを増しているまさにそのとき，イタリアで売り出された戦争体験ツアーが大人気になったのである。イタリアから戦争地域に入ったツアー客は，実際に戦闘に参加している兵隊に出迎えをうけ，戦場に案内される。迷彩服，軍靴，防弾チョッキなどが貸与され，兵器についてのレクチャーを受ける。希望すれば銃も撃て，実際に人間を狙撃したツアー客さえ現れたというのである［毎日新聞 1995年4月1日］。真正なスリルを味わうためならば，自ら戦場に赴き殺人を犯すことも躊躇しないまでに，人間の欲望は肥大化することがあるのである。

このような際限ない欲望の発露を踏まえれば，冒頭のイラク事件の日本人青年や同時期にイラクに潜入を試みた日本人バックパッカーたちが見せた果てしない好奇心が，けっして常軌を逸した「逸脱的行為」ではなかったことが理解できるはずだ。彼らをリスキーな行為に誘導するシステムと，リスク消費に対する欲望のエスカレーションをもたらすメカニズムが，バックパッキングには，あらかじめ，内蔵されているからである。

ところで，ベテラン・バックパッカーのヤギにイラク事件の青年について聞いたところ，彼は次のような感想を語ってくれた。

あの事件，100ドルしか持ってないってアホやって思いましたよ。ありえないでしょ。俺だったら行かないっすよ。あの時期に，イラクには行かないっすよ。まあ，旅した経験がなかったらじゃないですか？　そんなとこ行ったら，これからずっとヒーローですもん。「俺あの時イラク行ってきた」っていうたら，ずっとヒーローになれますもん。（大阪）

ヤギが繰り返した「ヒーローになれる」という言葉は，日本人バックパッカーのリスクに対する心象をよく表している。現在のバックパッキングにおける経験の多くが商品化されているならば，それに不満を持つバックパッカーにとって，もっとも真正な経験，本稿に則していえば真正なリスクを経験できる場所はどこか。一つの可能性は，ヤギがイエメンで遭遇した交通事故というようなアクシデントだろう。しかし，それは偶発的であり，誰もが望んで経験できるものではない。そうであるならば次の選択肢は，自らが主体的に選択できるという理由で，戦場が一つの候補地として挙がるのだろう。周囲の説得を頑なに拒み，“I need go”と自ら進んで戦場へ向かったという青年の行為は，商品化したリスクに満足できず，真正なリスク体験を望むバックパッキングの理念的価値観からすれば，ある意味で，必然的選択だったのである。

もう一つ重要な点は，ヤギが指摘するバックパッカー社会における「戦場」の価値である。戦場へ行ったバックパッカーは「ヒーローになれる」という価値観は，リスクの低減に傾注することで発展してきた観光産業がたどってきた軌跡とはきわめて対照的である。このような転倒した価値観が共有されている空間においては，戦場は避ける場所などではなく，むしろ積極的に行くべき場所となる。リスクの社会的意味が逆転するのだ。

この転倒した価値観がバックパッカー・コミュニティで共有されていることは，同時期にイラクへの潜入を果たしていた多くの日本人バックパッカーが，その経験を宿の情報ノートに誇示していたという事実からも容易に理解することができる。そしてもしも青年が無事に生還したならば，彼も，他の者と同様に，アンマンの日本人宿の情報ノートに自らの「イラク潜入記」を書き記していたかもしれない。自己のリスク体験を他者に提示することで，改めてバックパッカー・コミュニティでのヒエラルキーの上昇と，自己成長を実感することができるからだ。こうしてバックパッカー・コミュニティでは，他者のリスク経験を知ることによって自己のリスクへの欲望が喚起され，自己がリスク経験をし，それを提示することで他者をリスクへと扇動するというサイクルができあがるのである。

もちろん，青年がイラクに向かった本当の気持ちは，今となっては誰にもわからない。しかし日本人バックパッカーにとっての，旅におけるリスク体験が持つ文化・社会的意味を知ることによって，ようやく我々は，「戦場」へ向かった青年の心性と戦場バックパッカーが増加している理由を「合理的」に納得することができるのである。

ところがヤギによれば，事件が発生するかなり以前から，青年がバクダッドに向かったルートの情報は，すでに日本人バックパッカーのあいだで流通していたというのである。

あのルート，たぶんカイロのサファリ〔有名な日本人宿〕で聞いたんじゃないっすか。

情報ノートに書いてあるの見たことありますもん。あのルート，俺は行ってないっすけど，そんなにメジャーじゃないけど，知ってる奴は知ってますよ。あのルートで行ってきたっていう奴にも会ったことあるし。だいたい人数集めてタクシーをシェアして普通は行くんですけどね。それで何泊何日，３日ぐらいで何万円だっけなあ。そういう「ツアー」もあったっすよ，俺のときには。（大阪）

ヤギにイラク事件について聞いたとき，彼が間髪入れずに青年がたどったルートを言い当てたことは，いかにも皮肉なことだった。なぜなら，それはまさしくそのルートが商品化されていることの証明でもあるからだ。商品化されたリスクには満足できず，真正なリスクに渇望していた青年が，実は商品化という市場経済システムに回収されているだけでなく，商品化のサイクルの強化に加担すらしていたのである。青年ばかりではなく，アンマンの日本人宿の情報ノートに，日本人バックパッカーがイラク潜入記を誇示すること自体が商品化を促進させるのである。

その様子は，もはや戦場というテーマパークへ「真正性」というアトラクションを見物しにいくような感覚でさえある。結局，マス・ツーリズムの発展の要因が安全，安心，安価の３要素にあったように，大半の日本人バックパッカーもまた，安全，安心に危険を消費したいという願望を捨てることができなかったのだ。このような彼らの転倒しつつも，飽くなき願望をエンジンとしてバックパッキングの商品化は，商品化されていない周縁部分を取り込みながら日々巨大化している。そしてバックパッカーは，再帰的に，商品化によってますます真正なリスクを経験したいという欲望をエスカレートさせているのである。

5　バックパッカーから運び屋へ

バックパッキングにおける「危険」を消費する意味をもう一段深く考察するために，以下では，リスク体験に「失敗」した事例をある日本人バックパッカーの経験から考察してみたい。具体的には，旅の資金を稼ぐためにタイから台湾へドラッグを密輸しようとしたもののタイの空港でそれが露見して逮捕された[19]Ａの旅の物語を再構成する。この試みによって，リスク体験の「失敗例」が持つ機能の一端が明らかになるはずである。

タイのある刑務所には殺人犯や麻薬がらみの犯罪で死刑や終身刑を言い渡された重罪犯ばかりが収容されている。ドラッグの運び屋として一人の日本人バックパッカーが警察に逮捕されたのは1990年代なかばのことだった。裁判で終身刑を言い渡され，この刑務所に送られてきたＡのここでの暮らしは，すでに十数年になる（写真１）。

写真１　Ａが入所していた刑務所[20]。2011年８月23日筆者撮影。

Ａは地元の高校を卒業したのち，浪人生活を経てア

メリカの大学へ入学した。得意の英語力を生かしてアメリカの大学と大学院で人類学を学び，将来は研究者になりたいという夢をAは持っていた。

大学で人類学を学ぶうちに，Aの関心は次第に宗教に向いていった。そして大学に4年近く通い人類学の基礎知識を学んだAは，フィールドワークとして実際に宗教を実践してみようと考え，大学を休学してアジアへ向かう決心をした。1990年代初頭，こうしてインド，ネパール，タイなどを放浪しながら寺で修行をするというAの旅は始まった。

> チベット密教カギュ派の修行をしていた方にくっついて瞑想コースや灌頂〔イニシエーション〕につれていってもらいましたが，各寺の名前まではひかえていませんでした。でも，おシャカ様が初めて説法された鹿野苑Deer Parkのあるサルナートにはチベット寺はひとつしかなく，そこでマハームドラーという瞑想法の理論と実践のさわりをやりました。（手紙。文章は原文のまま。以下同じ）

このような経験を積みつつインドとネパールで宗教の「まねごと」（面会）を経験したAは，1990年代なかばに上座部仏教のフィールドワークをおこなうためにタイにやってきた。旅をすること自体が面白かったこともあるが，それよりもとにかく「悟りとは何か，悟りを科学したかった」（面会）のだという。

しかしバンコクに到着早々，Aは事件に巻き込まれてしまう。睡眠薬強盗に遭ってしまうのだ。

> タイについて1週間ほどした後，×××から×××のゲストハウスに移ってからのことです。お寺のウラにある×××[21]ゲストハウスに，一泊70バーツで泊まっていて，ある日ゲストハウス内のレストラン（と呼べるシロモノじゃないけど）で確か焼きメシのようなものを食べて部屋に戻り，眠くなったので眠りました。ウエストバッグをしていたかどうだか忘れましたが，ずいぶん不自然に長いこと眠った後，目を覚ますと，ウエストバッグがふとんのうえにあるのですが，中にあったパスポート，現金，チケットと全て盗まれていました。……あとは，かたわらのテーブルに置いていた，中古のニコンF4のカメラもなくなっていました。（手紙）

この事件を契機として，Aの旅はフィールドワークという初期の目的から根本的に変化していった。旅の資金を失ったからといって日本やアメリカに戻る気にはならなかったAは，フィールドワークを続けるために現地で金を稼ぐ道を模索しはじめる。

まずAは，タイのある大きな町で日本のCDやレコードの輸入と販売に挑戦してみた。しかしそれは「お小遣い程度」の稼ぎにしかならなかった。また日本製の音楽機器を欲しがっている現地店舗があるという噂を聞きつけたAは，それを仲介する仕事にも挑戦してみた。もちろんこれも儲けることはできなかった。

焦れば焦るほど空転してしまい，Aは経済的に逼迫していった。そしてタイのある町で，途方にくれながら酒を飲んでいたAの前に突然現れたのが自称イギリス人のピー

ターだった。白人男性で年齢は30～40歳くらいに見えたという。ピーターはAに，「5,000USドルの報酬で麻薬1キロを台湾まで運ばないか」と唐突に持ちかけてきた。突然の奇想天外なオファーに驚き戸惑っているAに向かって「〔空港で〕日本人はあやしまれないから体に巻いても大丈夫だ。前にボディチェックとかされたことないでしょ？」（手紙）と強い調子で説得してきたという。

最初はもちろん，Aは馬鹿げたことだとピーターを相手にしなかった。しかしピーターの口調に次第に気圧され，Aの気持ちは大きく揺れ動いた。

> 日本だったら，もし見つかったら，デカデカとニュースに出るでしょう？そうすると母親なんて，もう，生きていけないですよ。だけど台湾だったら，万が一見つかっても，そんなことはないかな，と。（面会）

実際にピーターと対面し説得されたのは，数回しかなかったという。しかしその数回の勧誘によって報酬やドラッグを運ぶ段取りにまでいつしか話が進んでしまい，引くに引けなくなったAはとうとうその仕事を引き受ける決意をしてしまった。

> ある時，準備が整ったというので，指定されたホテルに行き，そこで待っていると英語を話すタイ人（？）がモノを持ってやってきて，又別の知らないホテルに移動しました。（手紙）

袋に小分けされたヘロインを腹と太腿にテープで巻きつけたAはバンコクのドンムアン国際空港に一人で向かった。台湾の台北に到着したらどこのホテルでもいいからチェックインして，すぐにタイのピーターに電話をかける。そうすればピーターから台湾のビジネス・パートナーに連絡がいき，仲間がホテルに急行し，品物を回収する手はずになっていた。その後Aはホテルに一泊してバンコクに戻る。ヘロインを体に巻きつけている以外は日頃のバックパッキングと何ら変わらない一泊二日の旅のはずだった。

> アホなことにも，ももとパンツあたりにテープで巻いていて，空港では，カウンターやカスタムでも何もなかったのですが，ボーディングの前の金属探知機で，〔金属ものは全て外してあるのに〕「ピー！」と鳴って，横で，体を触られてそこで終わりとなりました。ボディチェックといったら，まず足とかウエストとか触るのに，今考えたら，太ももに巻くなんて，脳が死んでますよね。手錠をかけられた瞬間は，ほとんど映画みたいに，全てがスローモーションに見えて，全ての音が遠くに聞こえるというんですか……ほんと「これは現実じゃない……これは現実じゃない……」って夢の中にいる感じでした。（手紙）

ボーディング・カウンターでドラッグの密輸が発覚したAは，すぐに近くの小部屋に連行されて入念なボディ・チェックを受けた。そしてすぐにすべてのヘロインが発見され

た。

> カッターの先でちょこっと切って，粉を小さい容器に入れると，色が赤く変わるんです。「これが何か知っているか？」とかいろいろ聞かれましたが，すべて素直に答えました。その後，また廊下に出て，手錠をかけられて連れていかれるんですが，これを見て，並んでいる人が「ヒャー！」とか言ってて恥ずかしかったです。20～30 m くらい歩いたところで，誰かが「あれぇー！」とか言って叫んでるんで，後ろをふり返ったら，私のパンツのすそから白い粉が白いスジとなってうしろに続いていました。（手紙）

証拠品でもあるヘロインをフロアにまき散らすことは許さないと，A は歩くことを禁じられ，集まってきた多くの野次馬の中を今度は荷物を運ぶ台車に乗せられて空港内を移送された。A は，理由はわからないが，廊下にできた白いラインと，「身柄を拘束されて台車に座っている滑稽な自分の姿」を今でも忘れることができないという。

空港で自分の身柄を確保していた警察官から「初犯だし学生だから 2 年くらいで出てこられる」と慰められたので，「罪はそれほど重くない」と，当初 A は高を括っていたという。ところが現実は甘くなかった。担当弁護士からは事前に「懲役25年くらい」だと宣告されてはいたのだが，判決はそれをはるかに上回るものだった。死刑を求刑された一審の判決は終身刑（懲役100年），それを不服として控訴した二審でも同じく終身刑を言い渡されたのである。

タイの裁判制度は三審制だが，二審までで弁護士費用などで70万円を使い果たしていた A には，最高裁へ上告する経済力が残っていなかった。さらに裁判が進むにつれて，実は担当弁護士が民事事件専門だったことも判明した。刑事事件を担当するのは，なんと A が初めてだったのである。刑事事件における弁護の戦略に長けていないので，これでは寛大な判決を得ることは不可能に近い。言葉も制度もわからない異国の地で裁判をおこなうことの困難さを痛感した A は，そこで気力も尽きた。上告を断念した A の刑はこうして確定した。そして A の長い刑務所暮らしが始まったのである。

6　加速する好奇心

A の，旅を続けるためにドラッグの運び屋になるという短絡的で奇想天外な決断には，実は伏線がある。旅に出てアジアを周遊しているときに，A 自身もドラッグに手を出していたのだ。そもそも初めてのドラッグはアメリカ留学時代のマリファナで，その後 LSD も試してみたことがあるという。旅に出てからは，「一応全部やった」（面会）と語っているので，A はドラッグに嫌悪感や拒否感は抱いていなかったのだろう。

ドラッグ経験者がドラッグの運び屋になるには大きな決断の跳躍は必要なかった。ドラッグを「使う」か「運ぶ」かの差異は，自分の背中を誰かが軽くひと押しするだけで乗り越えられるわずかな段差でしかなかったのである。

アメリカの観光学者アンドリュー・レップとヘザー・ギブソンによれば，バックパッカーが旅で発揮する好奇心はリスクときわめて近い関係にある。バックパッカーたちは，政治的混乱，テロリズムなどのリスクを，「エキサイティングな経験すべき価値あるもの」へと解釈を逆転させるという。そしてそれらのリスクを体験することによって，個々人のリスクの限界値は拡大されていく。それがまたバックパッカーをより強い刺激へと誘引することに繋がっていくのである［Lepp & Gibson 2003：606-624］。よりリスキーな経験へと好奇心がエスカレートしていくのだ。

バックパッキングにおいて，初めて大麻を吸ったときの興奮はきわめて強い。異国の地で日本ではできない「逸脱的」な行為を試すスリルは，「異界」を強烈に実感できるに違いない。しかし何度も吸ううちに興奮とスリル感は減少していく。初めて経験したときと同じ強度のスリルと興奮を味わうためには大麻からLSDへ，そしてヘロインへとリスクの強度を上げていかなければならない。そうだとすれば彼らがリスクを冒すとき「ヘロインは旅のあいだにしかしないから自分は中毒にはならない」［Uriely & Belhassen 2006：339-359］などと，リスクを冒すことの正当性を自分に都合のいいように構築することは当然の帰着であるだろう。

ドラッグをやる行為には，ドラッグによる身体的・精神的な快楽と，リスクを冒す冒険的な自画像の確認という二つの意味があったのである。さらにそのような志向性のサイクルにはまり込んでしまった者にとってみれば，ドラッグの運び屋になることは，「逸脱的行為」というよりは，リスクとスリルの経験という意味においても，金銭的利得という意味においても，「魅惑的なチャンス」とさえ映ることだろう。

7　おわりに――「危険」消費の破綻

「危険」を消費する意味を検討することで，バックパッカーがリスク体験に「成功」することで自己成長物語を紡ぎだしていくプロセスは先に指摘した。さらにリスク体験に「失敗」した者によって，バックパッキングの冒険的でスリル満点な旅であるという表象が補強されている側面に，私たちは注目しなければならない。なぜなら，リスク体験に「失敗」した者の行為が「社会問題」化することで，バックパッキングがいかに危険であるかという社会的コンセンサスが再確認され，それによって旅をしてきたバックパッカーたちの経験の価値が再帰的に高まるだけでなく，経験そのものが「社会的事実」化されるからである。このような解釈空間においては，リスク体験に「成功」した者が困難を克服した勝利者とされる一方で，リスク体験に「失敗」した場合は，イラク事件の青年が現代社会の定番ワードである「自己責任」［ヨミウリ・ウイークリー 2004］というたった一言で葬り去られたことからも理解できるように，彼らのことが顧みられることはない。

この観点に立てば，バックパッキングにおいてリスクを冒すことの正当性は，容易に理解できるだろう。マス・ツーリズムであれば当然避けるリスクに対して，バックパッカーがあえてそれに踏み込んでいくことは，たとえそれが戦場という命がけのものであったとしても，彼らの側からしてみれば，それはきわめて「合理的」な選択だからである。

さらに加えて，旅のリスクが，たとえ「バグダッド潜入ツアー」のように商品化していたとしても，それは100％の安全を意味しないことを青年は身をもって証明した。安全，安心に消費できることに価値があるリスクの商品化であったにもかかわらず，青年のような犠牲者が出ることによって，「商品化されたリスク」の「商品化された」という部分が，かき消されてしまうのである。旅におけるあらゆるリスクは商品化されつつも，彼のような犠牲者の「貢献」によって「バックパッキングは危険な旅だ」という社会的認識だけは温存されるのだ。

つまり，旅におけるリスク体験の「成功」例はバックパッカー個人の好奇心や達成感という欲望を満たし，「失敗」例はバックパッキングの資源としての商品価値をより高める効果があるのである。それらは相互を補強しながら，バックパッキング全体に正のフィードバック効果をもたらしている。バックパッカーたちは，このような関連・連鎖によって高い価値を維持している目の前の商品化されたリスクを，あたかもテーマパークのアトラクションの一つであるかのように楽しみながら消費しているのである。

しかしだからといって，現代のバックパッカーのリスク消費そのものを根底から否定することは的外れである。そうではなく，「バックパッキングは商品化されていない」という幻想と願望を，まず，我々は捨てなければならない。そして，リスクまでもが商品化されつつある現状を踏まえたうえで，そのような経験を彼らが「今・ここ」から，どのように咀嚼，消化，解釈しているのかを考察することが重要なのである。なぜなら，たとえ商品化されたリスクであったとしても，それを消費したバックパッカーたちのそのとき感じたスリルはまぎれもなく真正な実感だからである。バックパッキングという旅行形態が発散するロマンチシズムはすでに幻想でしかないものの，リスクを軸にしたバックパッキングの経験は，バックパッカーがこれから歩もうとしている人生に，自信と確信をたしかに付与しているのである。

もう一つ指摘しておかなければならないのは，バックパッカーが自己成長を実感する契機についてである。A に面会し刑務所暮らしについて尋ねると，「いい経験をしている。刑務所の生活は危機管理という点で勉強になる。この経験を今後の人生に生かしたい」と気丈に明るく答える。しかし，終身刑で服役している A がその状況を「いい経験」だと解釈できるまでにどれほどの葛藤があったのか，想像するのは難くない。

その一方で，「脳が死んでる」と現在の境遇に追い込んだドラッグの密輸については自嘲し後悔の念を曝け出すが，ドラッグの快感を語るときにはその陶酔感を思い浮かべるように笑顔さえ見せることもある。ドラッグという一つの要素に限っても，A の感情と語りは錯綜しているのである。

また，事件のエピソードを語るときも，あるときは白人男性を「ピーター」と呼ぶが，ある時は「名前は忘れた」という具合に，そのたびに細部が微妙に異なる。ピーターの相貌や年齢を私が何度聞いても，「30歳くらいの白人」というかと思えば，「40歳くらいのイギリス人」といったり「わからないです」「どんな人だったか全然覚えてないです」とその都度違う言葉を発するので，私はいまだにピーターの具体的な人物像がイメージできないままでいる。もちろん，記憶の底に厳封してきた悔恨の過去を，私の要請に応えて呼び

起こすのだから，単純に忘れてしまった可能性がないわけではない。しかし私は，A の語りのあやふやさに，当初は「もしかすると，そのような人物はそもそも存在しないのかもしれない」とさえ思うことがあった。

しかしだからといって，このような A の語りの変奏を，A の記憶が曖昧なのだと判断しては問題の「本質」を見誤ってしまうだろう。なぜなら，この事件によって刑務所暮らしをしなければならなくなった A にとって，過去の忌まわしい出来事は，今でも続いている現在進行形の「物語」だからである。現在の不遇を思うたびに A が「今・ここ」の時点から事件を反芻し，「もしあのときこうしていれば…」というような後悔とともにさまざまな物語のバージョンを想像・創造することは無理からぬことだろう。さらに，構築された個々の物語の解釈をめぐって A の心中で激しいせめぎあいがおこなわれるのも，また当然のことであろう。哲学者の野家啓一がいうように，こうして A の事件は，裁判の過程や刑務所における日常生活というような事件後に起こった出来事ともリゾーム状に接続しながら，その関係を繰り返し記述しなおすことによって，幾重にも重層化されていくのである［野家 2009 : 12-13］。

さらに人類学者を目指していた A が，バックパッキングの「失敗」例の当事者として人類学徒の私の質問に答えなければならない痛恨と残酷さも，また感じずにはいられない。睡眠薬強盗に遭ったことが，その後の A の運命を一変させたが，私とて，私自身が行った 5 年間の自転車世界旅行の過程で（1993年～1998年），南米で 2 回，アフリカで 1 回，所持品のほとんどを盗まれるという経験をしている。幸い私の前には「ピーター」は登場しなかったので，私は A の轍を踏まずにすんだ。しかし所持品のほとんどすべてを失って意気消沈していた私の前に，もしも「ピーター」が現れたとしたら，私はリスクとスリルの面白さと，強い自画像を実感できるチャンスを，「馬鹿馬鹿しい」と一蹴することができただろうか。

バックパッカーがさまざまな旅物語を語るとき，その解釈をめぐって，彼らの内面でおこなわれる激しい交渉と折衝は容易に想像できる。彼らは，そのような多様な旅物語における多様な感情を反芻した末に，「いい経験をしている」という物語群を土台とする「今・ここ」の自画像を暫定的に選び取り，私に語るのであり，それは，アイデンティティのありかなどの可変的な性質を過大に評価する一部の論者が期待したように，あたかもスイッチを切り替えるように軽やかに選択できるような性質のものではないのである。

もちろん，他者に旅物語を語ったり情報ノートなどへ書き込んだりというような，物語の提示（の反復）には大きな力があることはたしかである。しかし「提示する」という実践だけに焦点化し過大評価することは，彼らの旅という実践の身体性（交通事故に遭うこと，逮捕されて身柄を拘束されること，刑務所で日常を送ること，など）と錯綜する感情群をともすれば捨象し，旅を自己成長のための予定調和的な回路として表象することに繋がってしまう。彼らが過去の旅の経験を再構成し再解釈するたびに，「後悔」「自己納得」「あきらめ」「怒り」というような，さまざまなバージョンの経験の物語が生成されている。それらの異なった解釈を併存させ葛藤する創発的な構築作用を経ることによって，彼らは自己成長の実感の契機にようやく到達することができるのである。

この自己成長のメカニズムを異なった視点でとらえてみると，別の側面が見えてくる。つまり，彼らが他者に旅物語を提示するのに熱中するのは，提示するたびに細部が異なった旅物語が紡がれ，そのたびに自己が変更されていくことを実感できるからである。もしも，彼らの旅の目的の一つに「自己成長」や「自己変革」が含まれているのならば，彼らは自分の旅物語を他者に提示し続けなければならない。日本人バックパッカーは，現地社会の人々よりも，他の日本人バックパッカーとの交流に熱心だという指摘がコーエンによってなされているが［Cohen 2003：95-110］，彼らの旅の目的を踏まえれば，それはある意味で必然だったのである。

注

1） 日本人バックパッカーがよく利用するゲストハウス，食堂，旅行代理店などには自らの旅の経験や感想を書くノートが置かれている場合が多い。それを情報ノートと呼ぶ。多くの日本人バックパッカーは情報ノートの書き込みを参考にしながら，次に訪れる場所，ビザの取得，使うべき交通機関，宿泊場所などを決定していく。つまり，情報ノートは，単に旅の感想を書くためだけにあるのではなく，相互扶助的な役割があるのである。

2） この青年は，メディアでも何度も取り上げられている。青年の具体的な情報に関しては，「篠崎耕太を探しています」HP を参照のこと。

3） 本稿は，筆者がおこなったアジア諸国でのフィールドワークに基づいている。海外での調査は，2004年10月から，タイ，ラオス，ベトナム，カンボジア，中国，ネパールで実施した。また日本では，2004年 3 月から継続的に「現役」と「元」バックパッカーにインタビュー調査をおこなっている。アジア各地のフィールドでは，日本人バックパッカー，ゲストハウス，旅行代理店，両替商，レストラン，観光局，日本大使館などへの聞き取りをはじめ，筆者が実際にバックパッキングをしながら「秘境ツアー」に参加したり，日本人バックパッカーと宿での生活や旅を共にしたりするなどしてデータを収集した。調査期間中に出会い，会話をした日本人バックパッカーは100名を超えるが，聞き取りをデータとしてフィールドノートに記したのは，個人情報保護の観点から性別を明らかにしない後述の A と，男性30名，女性11名である。

4） 第二次世界大戦後，1964年まで，日本政府は円のドルへの両替を厳しく制限し，一般市民による海外旅行を事実上禁止していた。1964年以降，制限を徐々に緩和していくのだが，それにともなって海外旅行が広く大衆化していくことになった。

5） 1964年 4 月 6 日の朝日新聞夕刊には，「自由化旅行の第一陣」という見出しのもと，「海外旅行自由化で外国へ出かける第一陣が六日午前九時二十五分，イタリア航空機で羽田空港を飛びたった。日本交通公社があっせんした「ヨーロッパ・ジェット旅行クラブ」の男六人，女十人のグループ」「費用が計七十一万五千円，十七日間の日程でイタリア，スイス，西ドイツ，フランス，イギリス，デンマークの六カ国を回る」という記事が掲載されている［朝日新聞 1964年 4 月 6 日］。これが自由化以降における，初めてのパッケージ化された海外旅行だった。1960年の大卒男子の初任給が約 1 万6,000円，そして 1 US ドルが360円だった時代を想起すれば，当時の海外旅行は，一部の富裕層だけが経験できる特権的なレジャーだったのである。

6） コーエンの分析後，このような旅人は「放浪者 wanderers」［Vogt 1976：25-41］，「徒歩旅行する若者 tramping youth」［Adler 1985：335-354］，「国際的な長期節約旅行者 international long term budget travelers」［Riley 1988：313-328］などと表現されてきたものの，現在では総称として「バックパッカー backpacker」が使われている［Uriely, Yonay & Simchai 2002：520-538］。

7） この 4 つの条件は，日本で初めてのバックパッキング用ガイドブック『地球の歩き方』の第 1 号『地球の歩き方②　アメリカ』［ダイヤモンド・スチューデント友の会編 1979］で挙げられたものである。ただ現在では，バックパッカー人口の増加にともなって，高級ホテルに宿泊したり，パソコンを携帯し情報を発信しながら旅をしたりするなど，多様なバックパッカーが出現してきてお

り，「バックパッカー」を明確に定義することができなくなっている。なお『地球の歩き方』をはじめとするバックパッキング用ガイドブックの分析や，バックパッカーの定義については大野［2010］で詳しく論じている。

8） ホイジンガは「面白さ」は本質的なものであり，それ以上根源的な概念に還元できないという［ホイジンガ 2009：19］。なお，遊びとリスクの関係性については，ホイジンガだけではなく，たとえばロジェ・カイヨワ［2009］や，ミハイ・チクセントミハイ［2007］なども言及している。ただ，本稿では，先行研究が解明した，リスク消費に内在される個人的な「面白さ」に焦点を当てるのではなく，個人的な「面白さ」であるはずのリスク消費が他者によって評価され，その評価に対して満足感を得るという「他者評価」の部分に力点を置いている。したがってホイジンガ，カイヨワ，チクセントミハイらの研究とはリスク消費に対する着眼点や，目的の位相が異なっている。

9） イスラエルの観光学者ナタン・ウリーリーとアメリカの観光学者ヤニフ・ベルハッセンは，ツーリズムにおけるリスクを，「身体」と「社会的規範」に関するものの二つに大別している［Uriely & Belhassen 2006：339-359］。一方，アメリカの観光学者アンドリュー・レップとヘザー・ギブソンは，リスク・ファクターとして①健康②戦争と政治的不安定③テロリズム④珍しい食物⑤政治的・宗教的ドグマ⑥文化的差異⑦犯罪の７つを挙げている［Lepp & Gibson 2003：606-624］。

10） アメリカ人1100人を対象にして調査を実施したアメリカの観光学者セヴィル・ソンメスとアラン・グレーフェは，収入が多い者ほどリスク地域を避ける傾向にある一方で，当人の旅の過去の経験は，これからの旅のいかなる決定にも直接的には影響を与えていないということを明らかにした。過去のリスク経験が，ツーリストの危険に対する嗅覚を鋭くすることはたしかだが，だからといって，それが今後の旅において，リスクを避けるという方向には直接的には結びつかないというのである［Sönmez & Graefe 1998：112-144］。

11） 『ヨミウリ・ウイークリー』の2004年11月14日号では，リスクを冒すバックパッカーが増加している様子を，具体的な事例を出して伝えている［ヨミウリ・ウイークリー 2004］。

12） 1980年代生まれ。女性。

13） タイ・バンコクは日本人バックパッカーのアジアの旅の最大の拠点となっているが，その歴史的経緯については新井［2000］に詳しい。世界各国のバックパッカーが集結するバンコクのカオサン地区の繁栄は，後述のバックパッキングの商品化の状況をよく表している。

14） 1973年生まれ。男性。大学卒業後，５年６カ月をかけて世界120カ国以上を旅した。

15） 「商品化」については，たとえば「性の商品化」というように，ジェンダーに関する研究分野で多くの議論が蓄積されてきた。そこでは，「商品化」というターム自体がすでに錯綜とした状況にあり，ほとんど意味をなしていないことが指摘されている。しかしながら本稿では，そのことを踏まえつつも，バックパッカー研究においては，バックパッキングがいまだに「商品化」されていない旅としてとらえられる傾向があるため，それら先行研究への批判の意味も込めて，あえてこのタームを使うことにする。なお，ジェンダー研究における「商品化」の混沌ぶりについては，たとえば，圓田［2001］に詳しい。

16） 批判の対象であったマス・ツーリズムの対極に位置する，個化された旅の形態であるバックパッキングは，ツーリズム研究の文脈では，一つの場所に過大な負荷をかけないということでオルタナティブ・ツーリズムの可能性を高く評価されてきた。放浪しながら現地の生の文化を味わうことに面白さを見出しているバックパッキングは，ホスト社会に文化や自然の商品化を求めないからである。しかし近年，バックパッカーが増加することで，バックパッキングが，徐々にマス・ツーリズム化されてきているという指摘がされている。現在のバックパッキングがどのように商品化されているのかについては，大野［2007：268-285，2010］で詳しく論じている。

17） 1996年当時のカンボジアは，まだポル・ポト派が一定の勢力を保持しており，政情が不安定であるばかりか治安も良くなかった。また無数に埋められた地雷の危険もあった。過去の内戦は現在の治安にも影響しており，外務省は2008年12月15日現在，「過去の長期にわたる内戦の結果，国内には銃器類が広く出回っており，これらの銃器を使用した強盗事件が首都プノンペン特別市等で発生しています。また同国では，内戦時に埋設された地雷について，政府やNGO等による地雷除去

作業が進められ，現在までに多くの地雷が除去されているものの，隣国タイとの国境付近等ではいまだ多くの地雷が残存しています」として，「十分注意してください」という渡航レベルを維持している（外務省海外安全HP）。

18） オランダでは，ドラッグを，コカインやヘロインなどの「ハード・ドラッグ」と，マリファナやマジック・マッシュルームなどの「ソフト・ドラッグ」に分類している。そのうえでハード・ドラッグは禁止，ソフト・ドラッグについては「コーヒーショップ」での販売を容認するという寛容政策をとっている。

19） Aについては個人情報保護の観点から氏名，性別，生年月日，出身地，収監された刑務所名など，個人の特定に繋がる情報は一切記載しない。また，論文に書くことについては，語りや手紙の一部を開示することも含めて，本人の承諾を得ている。なお，筆者がAと知り合ったのは2007年であり，それ以来，年に数回の面会や手紙のやり取りを続けてきた。

20） 入所以来，タイ国王への減刑嘆願書を出し続けてきたAは，それが認められ，2011年夏に出所して日本に帰国した。

21） 手紙には具体的な地名や宿の名前が書かれてあるが，筆者の判断で伏字にした。

参考文献

EYECOM Files編　1998 『暗黒地球トラベラーズ』アスキー。

朝日新聞 「自由化旅行の第一陣」1964年4月6日夕刊。

新井克弥　2000 『バックパッカーズ・タウン　カオサン探検』双葉社。

アーリ，ジョン　1995 『観光のまなざし――現代社会におけるレジャーと旅行』（加太宏邦訳）法政大学出版。

圓田浩二　2001 『誰が誰に何を売るのか？――援助交際にみる性・愛・コミュニケーション』関西学院大学出版会。

大野哲也　2007 「商品化される「冒険」――アジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験」『社会学評論』58(3)：268-285。

――――　2010 「冒険的な旅から冒険的な生き方へ――アジアにおける日本人バックパッカーの「自分らしさ」の軌跡から」京都大学提出，博士論文。

カイヨワ，ロジェ　2009（1990）『遊びと人間』（多田道太郎・塚崎幹夫訳）講談社学術文庫。

国土交通省観光庁編　2010 『観光白書』日経印刷。

下川裕治　2005 『香田証生さんはなぜ殺されたのか』新潮社。

ダイヤモンド・スチューデント友の会編　1979 『地球の歩き方②　アメリカ』ダイヤモンド・ビッグ社。

チクセントミハイ，ミハイ　2007（2000）『楽しみの社会学』（今村浩明訳）新思索社。

野家啓一　2009（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫。

ホイジンガ，ヨハン　2009（1973）『ホモ・ルーデンス』（高橋英夫訳）中公文庫。

毎日新聞 「ボスニアで“戦争バカンス”」1995年4月1日。

山下晋司　1999 『バリ　観光人類学のレッスン』東京大学出版会。

ヨミウリ・ウイークリー　2004 「自分探し青年の「親心のつらさ」」11月14日号。

旅行人編集室　1996 『旅行人ノート3 メコンの国』旅行人。

Adler, Judith 1985 Youth on the Road: Reflections on the History of Tramping. *Annals of Tourism Research* 12(3): 335-354.

Carter, Simon 1998 Tourists' and Travellers' Social Construction of Africa and Asia as Risky Locations. *Tourism Management* 19(4): 349-358.

Cohen, Erik 1972 Toward a Sociology of International Tourism. *Social Research* 39(1): 165-182.

―― 1973 Nomads from Affluence Notes on the Phenomenon of Drifter-Tourism. *International Journal of Comparative Sociology* XIV: 89-103.

—— 2003 Backpacking: Diversity and Change. *Tourism and Cultural Change* 1(2): 95-110.（再録 2004 Backpacking: Diversity and Change. In Greg Richards & Julie Wilson eds. *The Global Nomad : Backpacker Travel in Theory and Practice*. Channel View Publications, pp. 43-59.）

Elsrud, Torun 2001 Risk Creation in Traveling Backpaker Adventure Narration. *Annals of Tourism Research* 28(3): 597-617.

Goffman, Erving 1967 *Interaction Ritual*. New York: Pantheon Books.

Lepp, Andrew & Heather Gibson 2003 Tourist Roles, Perceived Risk and International Tourism. *Annals of Tourism Research* 30(3): 606-624.

MacCannell, Dean 1974 Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings. *American Journal of Sociology* 79(3): 589-603.

Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.

Riley, J. Pamela 1988 Road Culture of International Long-Term Budget Travelers. *Annals of Tourism Research* 15(3): 313-328.

Sönmez, Sevil F. & Alan R. Graefe 1998 Influence of Terrorism Risk on Foreign Tourism Decisions. *Annals of Tourism Research* 25(1): 112-144.

Uriely, Natan & Yaniv Belhassen 2006 Drugs and Risk-taking in Tourism. *Annals of Tourism Research* 33(2): 339-359.

Uriely, Natan, Yuval Yonay & Dalit Simchai 2002 Backpaking Experiences: A Type and Form Analysis. *Annals of Tourism Research* 29(2): 520-538.

Vogt, Jay W. 1976 Wandering: Youth, and Travel Behavior. *Annals of Tourism Research* 4(1): 25-41.

Wickens, Eugenia 1997 Licensed for Thrill: Risk Taking and Tourism. In Clift Stephen & Peter Grabowski eds. *Tourism and Health : Risks, Research and Responses*. London and Washington: Pinter, pp. 151-164.

インターネット資料

外務省海外安全ホームページ　http://www.anzen.mofa.go.jp/info/info4.asp?id=004#header　2008年12月15日閲覧。

篠崎耕太を探しています　http://kotashinozaki.web.fc2.com/　2012年12月30日閲覧。

中高年バックパッカーの旅　バックパッカー入門
http://www5.ocn.ne.jp/~homeless/kounen/kounen-24.html　2012年12月30日閲覧。

トリカゴ　http://www.tkago.net/　2009年４月26日閲覧。